

正福寺裏山古墳群について

墳形と位置関係

山口 哲 晶

1 はじめに

正福寺裏山古墳群について、名称のみは周^{あま}た知られている事は事実である。しかしながら福山市史には

「③正福寺山前方後円墳

山腹の稜線に存在し、二基上下に位置し、1基は後円部の直径12m・高さ5m・前方部共に長径21m・他の1基は後円部直径15m・高さ5m・長径25mで表面は葺石におおわれて埴輪円筒片が散在している。かつて上方の1基の後円部から・直刀片、土師器等が採集され、竪穴式か、箱式棺風の石室が所在したと土地の人は伝えている。」

と記載されているだけで、位置についての詳細は把握し難く、又、墳形についても前方後円墳と記載されているにも拘らず、円墳とする人々も多く、墳丘の測量図のない現在に於て明確に前方後円墳と断定し難い状況である。そこで、当会古墳研究部会独自で正福寺裏山

1号墳の地形測量を行い、次の様な測量図が得られたのでここに報告し、この測量図をもとにして墳形について考えてみたいと思う。合わせて、当古墳群内に於ての位置関係についても考えてみたい。

尚、地形測量には昭和59年9月8日・9月9日・10月6日・10月7日の4日間を費し、篠原芳秀・田辺英男・山口哲晶・田口義之・山根弘人・棗田英夫・佐藤洋一・井川博文・安原誉佳・七森義人の相互協力で実施した。

2 位置と環境

正福寺裏山古墳群は、福山市加茂町下加茂中組の正福寺背後のほぼ南西から北東方向にのびる低丘陵上に存在するが、この丘陵からは標高88mと低いにも拘らず加茂平野を一望に見渡せる好所にある。

この古墳群からは、加茂川をはさんで平野の東丘陵側・東南の方向に、前期古墳で列石を持った円墳の石槌1号古墳・同2号墳⁽⁴⁾及び

5世紀前半より6世紀後半頃まで営まれた吹越古墳群⁽⁵⁾があり、さらに谷をはさんで北方には中野古墳⁽⁶⁾がある。これらの古墳群は全て当古墳群より視界に入る事ができる位置にある。又、当古墳群の背後の山稜には桑木



正福寺裏山古墳群遠景

古墳⁽³⁾・下加茂古墳群⁽¹³⁾・掛迫北古墳群⁽¹⁰⁾・さらに、
 竪穴式石室を2基持つ掛迫前方後円墳のある
 掛迫古墳群⁽¹¹⁾がある。さらに、当古墳群より北方の谷をはさんだ北側にも倉田古墳群⁽⁹⁾・内山
 古墳群⁽⁸⁾・終末期古墳の猪の子古墳等⁽⁷⁾が存在し、
 当古墳群の周囲は1大古墳群地帯となっている。

かは確認できなかったが、現在墳頂部にくぼ
 みが残り、周囲に数個の石材が散乱している。
 尚、くぼみの周囲をトレンチ棒にて探査をし
 てみると、未だ地表面下に石材が埋っている
 可能性も考えられる。^①

出土遺物については、石室内より刀・朱の
 入った壺が出土したという。しかしながら両

出土品は現在
 行方不明の為
 確認までに至
 らなかった。
 尚、本古墳の
 丘陵中腹部よ
 り灰色の焼物
 が出土したと
 いう事で、お
 そらく須恵器
 の類であろう
 が、本古墳と
 の関係は不明
 である。^②

()内の番号は
 地図上の番号
 をさす。

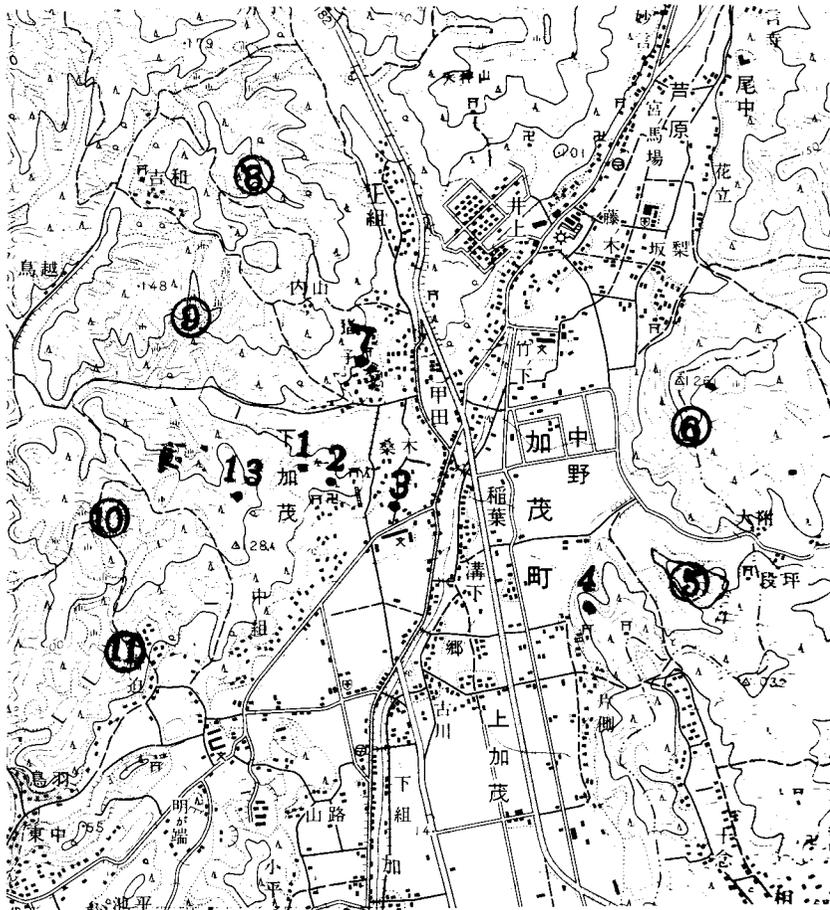


図1 加茂平野古墳分布図

3 内部主体と出土遺物について

正福寺裏山1号墳の発見の経緯について、
 正福寺住職渡辺達磨氏によれば、大正の終り
 頃、石工が石材を取り出そうとして掘り起し
 てみると、中に茶色に変色した人骨があり、
 古墳と判明したとの事である。

主体部の形態については残念ながら記憶が不
 鮮明の為、竪穴式石室なのか、箱式石棺なの

4 位置関係について

福山市史によれば、「2基上下に位置し…
 …(省略) 他の1基(2号墳)は後円部直
 径15m・高さ5m・長径25mで表面は葺石に
 おおわれて埴輪円筒片が散在している。」と
 している。

ところがここに、合の坪前方後円墳という古
 墳がある。府中高校出身の近藤正氏が発見し

たとあり、位置は加茂町小字合の坪で、倉大明神の本殿の西北西200m・標高60mの丘陵上にある。前方部を東に、後円部を西に向け、全長29.7m・後円部径18.8m・高さ2m・前方部幅4.3m・高さ1.1mの前方後円墳で、葺石と埴輪片が散布している^④。

この両古墳の数値の違いは、両者ともに略測の為に正確さを欠き、違いを生じたものと思われるが、葺石、埴輪片が存在するという特長が一致し、位置についても、地元の児玉光正氏によれば、正福寺裏山2号墳の位置の他には古墳はなく^⑤。その位置に合の坪前方後円墳があり、後円部の南側に河原石の石列が存在しており、墳丘の北側を往時道が通っており、その道の形状から前方後円墳であったことを指摘された。又、河相清人氏も同様の事を指摘された。

以上の事より、正福寺裏山2号墳と合の坪前方後円墳とは同一の古墳と考えた方がよさそうである。そうすると、同一古墳に2つの名称が重複しては混乱を招きやすい結果となり、統一された名称を与える事が急務である

と考える。そこで当地の小字名である合の坪前方後円墳と新たに命名することをここに提案したい。

5 墳形について

正福寺裏山1号墳を前方後円墳と考えるならば、主軸を南西より北東に向けた位置になる。ところが尾根の地形から北東方向にある前方部と後円部とのくびれ部と思われる箇所を線を結んでゆくと、前方部の形態が著しく変形し、かつ、主軸方向が後円部の中心と交わらなくなってしまい、例え雨等の自然崩壊が著しいとしても疑問を残さざるを得ない。又、前方部先端の地形に於てもなだらかに斜面が落ちてゆくのみであり、多少の勾配はあるものの前方部の地形とは言い難く、自然地形と考えた方がよいように思われる。

以上の事から、前方後円墳とするにしても自然条件を最大限考慮するとして、にわかには否定し難いが、肯定できる積極的な理由はない。ただし、帆立貝式前方後円墳とすると可能性は考えられなくもないが否定的である。

この地形測量図をもとに、現在の時点で考えられる事は、丘陵頂部に築かれた円墳とするのが妥当の様に思われる。

最後に、地元の正福寺住職渡辺達磨氏・児玉光正氏・河相清人氏の各氏より有益なる御教示を受けた。記して感謝の意を表したい。

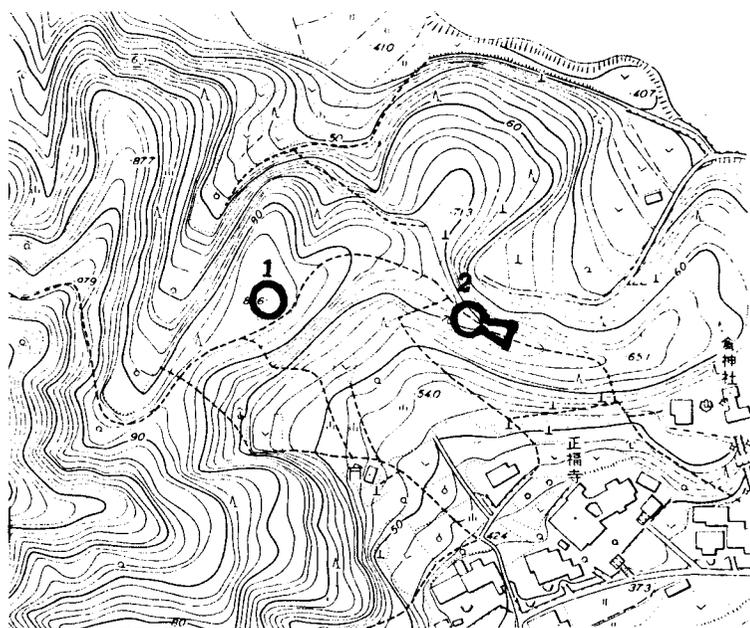


図2 正福寺裏山1号墳と合の坪古墳の位置関係 1:2500
(1.正福寺裏山1号墳, 2.合の坪古墳)

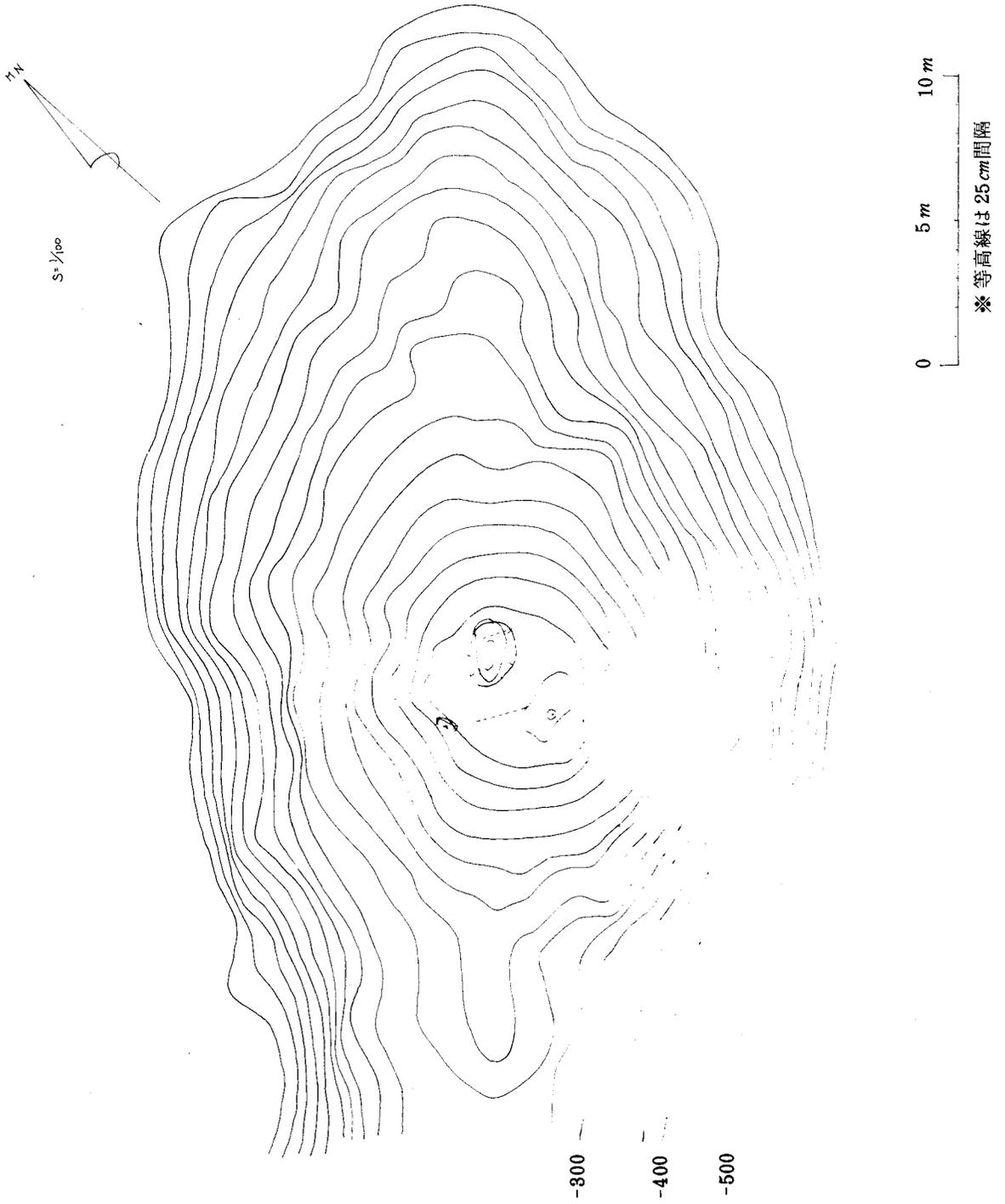


図 3 正福寺裏山 1 号墳墳丘実測図

<注>

- ① 測量図参照
- ② 正福寺住職の話によると、昔寺の屋敷内に小社があり、そこを開墾すると土器が沢山出土したとの事である。
- ③ 筆者注
- ④ 『古代吉備品治国の古墳について』
広島県立府中高等学校地歴部
- ⑤ 児玉光正氏によると、以前正福寺1号墳に①、合の坪前方後円墳に②、さらにその東側、倉神社の真上の位置の平坦地に③という札があったという。そこも古墳の可能性が残されている様である。

—昭和42年—

(引野町2—328)

備南中世山城跡の現状 I

1973年7月

我々は1972年2月から1年間にわたって福山市内の主要山城跡の現状と保存状態に関する調査を行ってきた。以下はその報告である。この報告が地方史研究の一助になればと思っている。猶、調査器材は巻尺を使用し、1000分の1略測図を作成した。

<本編収録城跡及び調査日時>

1. 大場山城跡 1972年2月27日
2. 別所城跡 1973年3月22日
3. 甲谷城跡 1972年4月2日
4. 銀山城跡 1972年3月21日

福山ユースドマップクラブ

田口義之 盈進高校3年
岡内讓二 福山工業高校3年
七森博明 近大附属福山高校3年
関戸和典 同上
猪原進 盈進高校3年
松本信二 県立松永高校3年
柏原正尚 盈進高校3年
村上誠之 同上
三島吉晴 同上

(顧問)

神谷和孝 近大附属福山高校教諭